bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

沈黙に向き合う
沖縄戦 聞き取り47年
〈99〉

石原 昌家

「沖縄民族皆殺し」の恐怖
32軍壕跡は証拠の「現場」
〝歴史修正主義〟の台頭⑦

戦争体験の聞き取り調査で、私が最も長い時間、日数をかけて何度も訪れたのは、浦添市牧港の又吉栄長さんだった。皇軍兵士として中国大陸での体験、沖縄戦では防衛隊の班長としての体験など、証言は尽きなかった。何回でも証言することをいとわなかったのは、戦争の醜さ、凄惨さを若い人へぜひ伝えてほしい、という栄長さんの強い使命感からであった。

「戦争は平和な時に準備が進む」ということを、中国国内を転戦する軍隊の中で上官から教わったとも証言していた。沖縄戦そっくりの軍事演習が、その31年前に浦添城下で行われていたことを、新聞（『琉球新報』1913年12月9日、14年1月22日）記事を読んで知っていた。それで、栄長さんの証言は「平和な時」の軍事演習のあとに、本番が来ることを裏付けていた。その教訓を伝える義務があることを自覚し、私はくり返しこのことを伝えている。

私が連載中の「〝歴史修正主義〟の台頭」シリーズで、その先行きを恐れていた状況が、いま現実化しつつあると思えるので、生き地獄の戦場を生き延びた人の証言を聴きだした者として、この紙面で改めて伝えたい（2020年3月19日付の本連載第58回に掲載）。

皇軍兵士の体験

私は数千人の戦場体験者から聞き取りをしていて、パニック状況の中で冷静に戦場彷徨をしていた人がいたことを知り、人間が潜在的に持っている力に圧倒された。その語り手・又吉栄長さんは、皇軍兵士として中国戦線での体験を語っている最中、「録音を止めて」というほど恐怖がよみがえった様子だった。

それは転戦中だった小部隊の一人の兵士が中国人に殺された仕返しということで、斥候兵を先導したはずだと、近くの50～60人ほどの小集落の老若男女全員を、弾丸を節約するため、手斧で皆殺しにした現場にいた。

私は栄長さんにその時どうされていたのかとすかさず聞いたら、同僚兵の新垣というクニンダンチュ（中国系ウチナーンチュ）に、〝あんたのウヤファーフジ（ご先祖様）の国でこんな恐ろしいことをしているのを、どう思うのか？〟と、問うたら、自分が中国系だと部隊に知れたらどうなるかわからない、ということで〝アビランケー（そのようなことを聞くな、の意味か）〟と言っていたと、恐怖に慄いていた状況を証言していた。部隊による凶行現場で、二人は身を潜めていた様子がうかがえた。

避けた首里決戦

このような戦場経験を経て、沖縄戦では防衛隊の班長として浦添の激戦場に立たされたのである。皇軍部隊の醜さの極致を知り尽くしている栄長さんには、木を見て森を見ずの例えでいうと、日米の戦闘場面という木々を見ながら、日米両軍の戦闘全体という森が見えていた稀有な人だった。

防衛隊の班長の立場で、激戦場の浦添から知人の防衛隊員を引き連れて、南へ南へ逃げることにした。首里近くまで逃げ延びてきた時、首里軍司令部部隊が、南へ撤退していくのを察知した。

次の証言は、戦場経験者が冷静に分析して見えた森だ。「たくさんの避難民がいる戦場で、軍司令部を設置してある首里で決戦するのが戦争の常識だのに、南部へ撤退したら、沖縄民族は皆殺しにあうと思い、その時点からなんとか牧港の知り合いを引き連れて投降しようと決断し、行動に移した」

この証言を聞いて、激戦場の真っただ中で、このような分析ができる栄長さんは並外れた人で、庶民の中での天才的な人に出会えた、と感嘆した。その時点から怖いのは、沖縄の中の戦争協力者と後ろ弾（日本軍兵士）だった。

したがって、投降の同行者は牧港住民と信用できる知人に限っていた。投降の機をうかがいながらも被弾死者はでるので、また、途中出会った友人知人を説得して、喜屋武半島を一周する形で、糸満方面に侵攻してきた米軍の最前線に向かった。恐怖に慄きながら投降した。証言の途中、「同行していた友人が近所に住んでいるよ」と証言を中断して呼びに出かけた。

同姓の又吉さんが、沖縄民族が皆殺しになるから「種人（サニッチュ）やシジエーナランドー（男性は沖縄人の子孫を残すため死んではいけないよ、の意味か）と、栄長さんがみんなに声をかけてくれたので私たちは生き延びることができたのですよ」と、裏づけ証言をした。

重みある証言

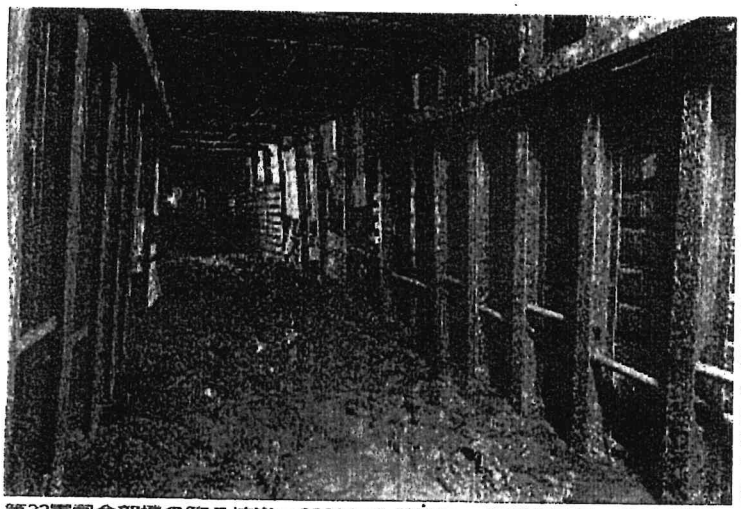
「32軍壕司令部壕の保存・公開を求める会」の末席に私もいるのは、この栄長さんの証言があったればこそだった。

牛島第32軍司令官の首里軍司令部の摩文仁丘への移動・撤退というのは、戦闘の常識としてはありえないと、砲煙弾雨の最中に戦闘経験者が肌で感じ、「沖縄民族皆殺し」になるという恐怖感に襲われたというのは、重みのある歴史証言である。

米軍の「本土（皇土）上陸を遅らすための時間稼ぎ・捨て石作戦」で、避難住民を盾にした形による牛島軍司令官の摩文仁への撤退作戦は、栄長さんの言葉では「沖縄民族皆殺し」作戦だった。首里決戦を避けた第32軍司令部壕跡（写真参照）は、まさに間接的住民大虐殺を裏づける動かぬ証拠の「現場」なのである。栄長さんが司令部撤退時に体感した「沖縄民族皆殺し」の恐怖は、単に77年前のできごとであろうか。

現実に起きた「プーチン・ロシア軍のウクライナ武力侵攻」が他人事ではないような、日米の軍事演習が激化している現在の琉球弧・南西諸島では、栄長さんの「沖縄民族皆殺し」の恐怖を共有し、それを拒絶する意志表明をする時ではないだろうか。その表明の場のひとつとして、「ノーモア沖縄戦　命どう宝の会」の結成総会が準備されつつある（次回は、大江・岩波沖縄戦裁判の結末とその意味について述べたい）。

（次回は4月後半掲載予定）



第32軍司令部壕の第5坑道＝2020年6月30日、那覇市首里（代表撮影）